

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第235回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

就職活動の本格化に伴って東京駅をよく利用するようになった。個性が際立つ赤レンガの駅舎を通るにつれて、個性的な建物の由来について好奇心が高まった。新橋と横浜の間に日本で鉄道が初めて開通したのは1872（明治5）年で、東京駅に延伸したのは1914（大正3）年である。今は日本の中心だが、開設は意外に遅い。

忙しい都心の静かな空間

連の建物を手掛けたジョサイア・コンドルのもとで修行し、日本銀行本店などを設計した建築家である。辰野は、レンガや石造りの建物が立ち並ぶ丸の内を意識して、赤レンガの東京駅を設計した。イギリス積み風の赤レンガの駅舎は名所となったが、終戦間近の1945（昭和20）年5月の空襲で火災となった。鉄骨造りの屋根は焼失したがレンガの壁やコンクリート床は残り、歴史を踏まえ、近代的な遺産を保存活用「すべき」という声を受けて発足した東京駅周辺再開発審査委員会などの検討の後、88年に赤レンガ駅舎の形態を保全する方針が打ち出された。

現在の駅舎は開業100周年の2014年に新築された。耐震性や機能性を確保するため、以前のものを単純に「保存活用」する方法は断念し、辰野金吾の設計をもとに復元的に新築したものだ。建

つたため、突貫工事で再生を急いだ。戦後の混乱期で資材も不足し、3階建てを2階にする、屋根の小屋根を調達可能な木にするなどの変更をして47年に完成した。

豊かさを感じさせる東京駅前

新幹線の発着など東京駅の機能が拡大するに伴い、手狭になったことをつけ、77年には再開発が発表され、超高層ビル化が検討されるなど、駅舎の取り壊しも議論された。「地域

の経済活動を支えるたくさんの多忙な人々が行き交う東京駅だが、愛らしい駅舎と周辺のくつろぎの空間は対照的な静かさで、そこに日本の豊かさを感じる。

【教員のコメント】

駅前と行幸通りの一体的な整備も見逃せない。駅前には公園のようにくつろぐ人がいる。広く開放的に整備された行幸通りを歩けば、皇居も見学できる。行幸通りの下は地方の農作物や海産物の市が行われ、人々が触れ合う空間となっている。日本は贅沢を支えている。



西川 美波
不動産学部4年



東京駅丸の内口の行幸通りに面した一画。公園のようにくつろぐ人もいる